

---

# ウェーブの森の役者たち

椿光晋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウェーブの森の役者たち

### 【Nコード】

N1200P

### 【作者名】

椿光晋

### 【あらすじ】

昔は売れっ子俳優の三川と三川にあこがれた少女との物語

「レインコートに雨はいる1、2、3」

劇団レインコートに応募してきたのは、有名な……

「宝玉ってどこにでもいるんだな1、2、3」

劇団レインコートを舞台にした物語



## 第一話 レインコートに雨はいる

### 1 劇団レインコートに雨はいる

その日は劇団の仕事もなく、友達の家で「打ち上げにこない？」と軽いメールが来た。

「打ち上げ？ なんの？」と汗の絵文字を入れて送ったら「俺の最高傑作の舞台の打ち上げだ」と返事がきて、俺は内心「ああーめんどくさい」と棒読みの台詞が出てきた。

「俺あんまし、関係ないだろ 俺はパス」と送った後、返事は来なかった。

うたた寝して、1時間ちよつとたつたとき、クラクションがやたらとうるさかった。

窓から外を見ると、中古車センターで安く買ったと、大阪のおばさんみたいに自慢してきた、黒のパジエロが止っていた。

《あいつ、迎えに着やがった》俺はケータイをマナーモードにセットし、ドアにチェーンをつけ、俺は布団の中に隠れた。

古いアパートのため、階段にギシギシとさび付いた鉄が人の体重に悲鳴をあげた音が耳に余韻のように残る。

ヤクザから逃げる人の気持ちがあるの少しわかった。

「三川ー いるのはわかってるんだ。でてこい！」良い声が今日はやたらと怖かった。

ドアノブをがちゃがちゃさせる錦戸。あかないのを承知の上でこんなきとをしてくるところが、なんとなく、皮肉な面を思わせ、居留守がばれてることを案じさせた。

30分ちよつとすぎたころ、錦戸の嫌がらせに近い三川コールは終わっていた。

「もう、いないだろう・・・」「チェーンをはずし、そつとあをあげた・・・

「三川！」とドアの前に錦戸は座っていた・・・

その後、無理やりつれてかれたのは言うまでもない。

古いパジェロに乗って、少し長い錦戸とのドライブは古着屋で一端休憩し、パジャマに近いジャージのままで行くのは失礼だ（お前が無理やり連れてきたんだろうが）と錦戸が言うため、古着屋で安い服で着飾り、また車に乗った。

「それにしても、お前老けたな。髪なんてキューティクルが活動を停止してるじゃん」と笑いながら言うてきたが、同い年の錦戸に比べたら老けてるのがよくわかる。

小6からの付き合いの錦戸。一緒に歩いていても、錦戸の整った顔に女子が群がり、俺はおこぼれをもらうような、さびしい青春時代をすごし、一緒に劇団にはいつて役者を夢みてがんばった親友だ。

だが、最初のほうは俺のほうが上にいた。主演舞台をまかされて、芸能事務所に引き抜かれた。錦戸はわきのわきで、俺は初めて、錦戸をこえた。

でもすぐに、錦戸は劇団の看板役者となり、多数の事務所からのオファーを蹴って、劇団の星になった。

俺はというと、最初だけ。トーク番組にでたがまったく話せず、レギュラーがすぐに準レギュラーに、最終的には番組を下ろされ、次は事務所と同じ系列の劇団に入れられて、今は看板俳優どころか、照明や大道具、死体役ばかりだ。

「三川って、これからどうするの？」 運転している錦戸がいきなり話しかけてきた。

「これからって？」

「劇団のこととか、結婚とかさ」

「劇団の仕事ならなんとか食っていけるくらいはもらってる。でも、恋人もいないから関係ないけど、結婚とかしたら、金銭的に難しい。今はこのままでいいよ。欲もってもしみないしさ」

「大人だなー 三川は」

「お前よりは修羅場を経験してるからな」

そうこう言ってるうちに居酒屋についた。錦戸はコインパーキングに車をとめてくるといい、俺を降ろした。

『劇団レインコート様』と看板が外に出してあった。この劇団に

また顔を出すことになるとは……

俺は事務所のオフアールにのって、この劇団を去った。だけど、錦戸は全部蹴ってまでこの劇団に残った。

「俺はお呼びじゃないはずだ」　口からこぼれた言葉は、俺を暗くする。

「なに、しょぼついてんだよ」肩をたたいた錦戸は、ガラガラと居酒屋に入った。

中で「おせえーぞー錦戸」「もう、始まってんだぜ！」などと、錦戸を迎えて歓声が広がっていた。

今からでも、帰ろうかな……

「おーい、三川。早くこいよ！」

俺はいやいや、中に入った。

見覚えのある顔から、新顔まで劇団は昔と変わったみたいだ。<sup>レイアウト</sup>

俺は錦戸の隣に座り、酒を飲む気はなかったため、コーラをちびちび飲んでた。

錦戸の周りには、入りたての若い女が群がるようにいた。

《昔もこうだったよな……》心のなかでつぶやいた言葉は、口からため息として出てきた。

「三川ー」と手を振る男。俺は無視し料理に手を伸ばした。

「三川、お前も変わったな」いきなり頭をたたいてきた。  
石田秀劇団いしだしゅうにいたころに一回だけ、喜劇で一緒だった。

「4年もあれば人は変わるさ」少し、ブスくれた俺は話したくなかった。

「お前は変わらないと思ってたのになー今はしけた感じになつて」

「それは言いすぎだよ」神永未来かみながみらいこいつも同期みたいなものだ。

「久しぶりだ」俺は軽く受け流そうとしたが……………

「三川くん、本当に変わったね。そんな風に話をそらすなんてなかったのに」

「昔からこんな感じだったよ……………」そういつて席を立ち

俺は、トイレに逃げた。便座に座って、頭を悩ませた。

昔は仲がよかった二人にこんな接し方しかできないのか俺は……………

1時間が過ぎ、俺はトイレから出てきた。みんな酔いつぶれた人が目立つ。

錦戸は酒を飲んでいなかったと思うが、寝ていた。昨日まで舞台公演してたから仕方ない。

コーラを注文したあと、ポテトに手を伸ばした。うじうじしてる少女が気になっていたら……

「三川さんって、ウェーデンの森で主演やってた人ですよね」案の定、声をかけられた。

緊張して発した言葉はカミカミで、聞き取れなかったが……

ウェーデンの森……

懐かしい舞台の名前は、そのころの稽古や舞台上で演技をしている時を思い出した。

あのころはよかったな

「そうだよ。もう、4年も前だけだね」少し自慢げに、かつ、威張らない程度に言った言葉は自分のなかではかっこよかった。

「あたし、その舞台見て、この劇団に応募したんです」

「へえー。レインコートにね……でも、そのころだとまだ、劇団は売れてなかったし、ほかにたくさん合ったのに」

「あたし、最初は違う劇団に応募したんですけど、先生からウェーデンの森のチケットもらったんです。で、見たらかっこよくて、すぐにレインコートに応募しました。」

その子の目は子供がおもちゃで遊ぶときみたいな好奇心で埋め尽くされていた。

水をさすかのように俺は

「あの時期、主演を誰にしようか迷って、若かった俺と錦戸が最終選考まで残って、最後は俺になった。今のレインコートは簡単に言ったら、あの時、錦戸にしとけばよかったって、愚痴ってるらしいぞ。」

あの舞台みて、ここに入ったなら違う劇団探したほうがいいかもな。俺なんかにあこがれて入ったのは間違いだぞ」

そう言つとその子は反論してきた

「それは違いますよ。だって、みんな三川さんのこと、尊敬してる後輩もたくさんいますし……」

言葉が詰まったみたいだ。ほらみる……

「俺は今、2流劇団の死体役や照明とかだよ。最初は売れて、すぐに落ちた、若手俳優のなりの果てだ。」

「でも……」

「いいか、錦戸にあこがれたほうがいいよ。暗くもないしね……」

「あつ、あたし、初瀬彩加です」

俺は無視し居酒屋から出て行つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1200p/>

---

ウェブの森の役者たち

2010年11月25日00時21分発行